



TITLE:

## 本論文集について

AUTHOR(S):

中山, 大将; 福谷, 彬

---

CITATION:

中山, 大将 ...[et al]. 本論文集について. 2012年度 京都大学・南京大学社会人類学若手研究者共同ワークショップ報告論文集 2013: 1-2

ISSUE DATE:

2013-01-21

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/186322>

RIGHT:

## 本報告論文集について

本冊子は、2012 年 9 月 21 日に中国南京大学仙林キャンパス社会学院（河仁楼）で行われた、「2012 年度京都大学・南京大学社会学人類学若手研究者共同ワークショップ」の報告論文集である。

2010 年の夏に京都エラスムス計画により、中山大将、櫻田涼子、平井芽阿里、福谷彬ら 6 名が南京大学へ派遣され、2 ヶ月間当地で中国の学習と、李徳営と巫（当時：南京大学外国学部所属）を含む南京大学社会学院の院生との共同調査を行った。その成果は、『京都エラスムス計画 2010 年度中国社会研究短期集中プログラム成果報告—南京市・江蘇省南部の都市と農村—』（2011 年）にまとめられている。

2011 年の夏には再度京都エラスムス計画により、中山大将、櫻田涼子 2 名が南京大学へ派遣され、一ヶ月間の中国語学習と南京大学社会学院院生との共同調査を行ったほか、『京都大学・南京大学若手研究者共同フォーラム』を行った。京都大学からは中山、櫻田、両名が報告を行い、南京大学からは王華ら 3 名が報告を行い交流を行った。巫はこの際に通訳を担当した。この成果は、『京都エラスムス計画 2011 年度中国社会研究短期集中プログラム成果報告—京都大学・南京大学若手研究者共同フォーラム報告論文集—』（2011 年）にまとめられている。

2012 年は京都エラスムス計画による派遣はなかったものの、有志が計画を立て、2010 年以来協力を得ている張玉林教授と提携し、再度ワークショップの開催を実現した。時局柄、事前に中国国内で調査を行っていた中山が北京で国籍を理由に宿泊拒否を受けるなどの事態も起きたが、開催の是非を声にする者が誰ひとりいなかったことは、両者の強固な信頼関係を表わしている。

本報告論文集では、報告時の言語そのままに報告論文を掲載しており、その多くが中国語である。ただし、中国語に精通しない読者のためにも、巻末に日本語要旨を掲載している。また、通訳として同行した巫が、ワークショップにおける質疑応答を中心に、ワークショップでの議論の概要を日本語と中国語でまとめている。これらに目を通して、日中の若手研究者の趨勢と交流の一端を知っていただければと望む。

国際ワークショップと言え、英語での交流が重視されるが、本ワークショップではあえて使用言語を自由にし、各論文の様式も執筆者の専門分野に準じ、あえて不統一のままにしてある。アジアにおいてアジアの言語で交流することには大きな意義があると考えている。日中は言語・文化的に多くのことを千年、二千年の時間をかけて共有しており、特に漢字を媒介に多くのことを理解、あるいは誤解し合える関係にいまなおあることは忘れるべきではないであろう。また、英語での報告も交えることで、現代東アジアにおける日中英各語の関係を考える機会を得ることができるであろう。

来年度も同様の交流を地道に続けて行けることを願っている。報告者やコメンテーターとして参加して下さった教授陣はもちろんのこと、ワークショップ開催、本報告論文集作成にあたって、常に惜しみない協力をくださった張玉林教授（南京大学）と、平田昌司教授（京都大学）に感謝の意を表したい。

中山大将 福谷彬  
2012 年 12 月 1 日

## 关于报告书

本论文集为2012年9月21日在中国南京大学仙林校区社会学院（河仁楼）举行的“2012年度南京大学—京都大学社会学人类学研究生论坛”的报告书。

2010年夏天中山大将、樱田凉子、平井芽阿里、福谷彬等六名日本年轻学者通过“京都伊拉斯谟计划”被派往南京大学进行汉语进修，并与李德营、巫靓（当时南京大学外国语学院硕士研究生）等南京大学的学生进行了共同调查。其成果收录为《京都伊拉斯谟计划2010年度中国社会研究短期集中项目报告书：江苏省南京的城乡》（2011年）。

2011年夏天中山大将、樱田凉子再次通过“京都伊拉斯谟计划”被派往南京大学。这一年除了进修汉语、共同调查外，还在南京大学举行了“南京大学—京都大学社会学人类学博士论坛”。京大的中山、樱田以及南大的王华等三名博士研究生进行了报告。其成果收录为《京都伊拉斯谟计划2011年度中国社会研究短期集中项目报告书：南京大学—京都大学社会学人类学博士论坛》（2011年）。

2012年虽没有人被派往南京大学，但有志者与一直协助“京都伊拉斯谟计划南京派遣”的张玉林教授商量，最终实现了今年的论坛。然而，今年的论坛恰逢中日局势紧张，报告者之一的中山大将在论坛开幕前进行调查时，曾因是日本人，在北京被宾馆拒绝入住。但即便是这样的情况，论坛依旧顺利举行，由此印证了双方深厚的信赖关系。

本论文集中每位执笔者都按照报告时的语言撰写了论文，因此大部分为中文。对于论文的格式，我们也没有统一要求，而是尊重每位执笔者专业领域的论文书写格式。作为翻译参加本次论坛的巫靓用日语及汉语整理了本次论坛讨论部分的内容。对于不精通中文的读者，卷末附有日文摘要。我们希望通过这样的方式，让更多的人了解中日年轻学者的研究以及交流。

对于“南京大学—京都大学社会学人类学博士论坛”，我们一反国际论坛的惯例，没有严格要求与会者使用英语进行交流。这是因为我们相信在东亚使用东亚语言交流的重要意义。在过去的一千年、两千年中，中日等东亚的国家拥有着许多关于语言 and 文化的共同记忆，至今我们仍因汉字相互地理解抑或是误解。因此，从语言的角度来讲，这次的论坛也为我们提供了一次重新思考东亚语言的机会。

最后，我们向报告者、与会的教授们以及在论坛的举行及报告书制作方面给予大力协助的张玉林教授（南京大学）、平田昌司教授（京都大学）表示衷心的感谢。我们期盼明年这一论坛的继续。

中山大将 福谷彬

2012年12月1日

